

早稲田大学博士論文(審査報告書)		
	学位記	文科省報告
2004	3818	甲1931 乙

博士（文学）学位請求論文審査報告要旨

水口幹記「日本古代の文化受容と書物・読書」

本論文は、日本古代において、中国の書物（いわゆる漢籍）がいかに選択され、読み解かれ、そして継承されていったのかという観点から中国文明の受容のあり方を解明するとともに、「異文化」に遭遇することで浮き彫りにされてくる日本古代史の実体を考察したものである。

本論文の構成は、序論「日本古代における中国文化受容研究の方法試論」、第Ⅰ部「祥瑞思想と書物・読書」、第Ⅱ部「『天地瑞祥志』の基礎的考察」、第Ⅲ部「古代儒学の書物とことば」、終論「文化受容と書物・読書－総括と課題・展望－」とから成るが、さらに第Ⅰ部と第Ⅱ部はそれぞれ5章に分かれ、第Ⅲ部は6章に分かれている。

序論は、本論文が採用する出典研究の方法について試論を述べたものである。とくに小島憲之氏の出典研究という方法を高く評価しつつも、小島氏の方法が作者の意図の解釈という側面に傾斜し過ぎているとして、読者の選択と理解のあり方にも重点を置いた研究が必要であるとする。

第Ⅰ部は、日本古代における中国の祥瑞思想の受容形態を、中国と日本の様々な書物を介して解明しようとしたものである。このうち、第一章「延喜治部省式祥瑞条の構成」、第二章「延喜治部省式祥瑞条の成立過程」、第三章「延喜治部省式祥瑞条における『修文殿御覧の利用について』では、日本古代の『延喜式』治部省式にみえる祥瑞品目リストとその双行説明文の典拠を探り、当該祥瑞条の二段階成立説を提示して、日本における祥瑞観念と中国の思想との差異に注目する。とくに、当該双行説明文が中国の『芸文類聚』祥瑞部、『宋書』符瑞志、『顧野王符瑞図』、『孫氏瑞応図』、『修文殿御覧』休徴部の五書から単独に、あるいは組み合わせで引用構成されたことを解明する。そして、これら中国の書物が、いずれも引用するにあたって簡便な性格を持っていたことに注目する。さらに、当該双行説明文全体の特徴としては、典拠とした中国の書物の説明文の中から「王者」云々ではじまる文章をすべて削除して引用し、中国の思想的な意味を一切採用しなかったことを強調する。第四章「天文・祥瑞の典拠とその意味－『革命勘文』における類書・図書の利用について－」では、博識を誇示するかのような三善清行の『革命勘文』第二・三条の天文現象説明文が、すべて『天地瑞祥志』と『顧野王符瑞図』という限られた類書からの引用に過ぎないことを論証する。そして、平安朝の知識と権威のあり方を問題視する。第五章「表象としての〈白雉進献〉－文化受容における軋轢回避の様相－」では、『日本書紀』白雉元年条にみえる白雉進献と白雉改元の記事のうち、前者のみが事実に近いものとする。そして、アナトから贈られてきた白雉の進献儀礼は、『漢書』『後漢書』などの書物からの知識や唐の元会儀礼に倣ったものであるが、対新羅意識、境界としてのアナトの国見、鳥にかかわるタマフリ、ニへ貢納、孝徳の即位儀礼、中国的「天」と「高天原」の混合意識などの複合的な側面を収斂したものとする。

第Ⅱ部は、9世紀後半に初見し、三善清行によっても採用された『天地瑞祥志』について、基礎的な考察をおこなったものである。第一章「『天地瑞祥志』の成立と伝来に関する一考察」では、尊経閣文庫蔵本などの伝写本の調査を踏まえて、新羅人編纂説を検討し、合わせて編纂と伝来をめぐるいくつかの可能性を提示する。第二章「『天地瑞祥志』第一「二、明載字」翻刻・紹介と一、二の考察」では、「啓」（序文）につぐ冒頭部である「二、明載字」が『漢書』五行志や『玉篇』の影響を受けていることを論述し、最後に当該部の翻刻校訂をおこなう。第三章「『天地瑞祥志』の受容、その仕方―特に、「第七」の出典研究を手掛かりに―」では、天文記事が集中する「第七」を取り上げ、『天地瑞祥志』が受容された条件として、天文生の指定教科書を多く引用していること、類書や形態の利便性、競い合う諸「道」の新たな教科書化などがあるとみる。そして、『漢書』『晋書』天文志にかわって本書は権威書になっていったとする。最後に、当該部の翻刻校訂と所引漢籍出典一覧を付す。第四章「中世における『天地瑞祥志』の利用状況―『天変地妖記』と『家秘要録』の検討を中心に―」、第五章「近世における『天地志瑞祥』の利用と衰退」では、中世の天文勘文集に『天文要録』とともに本書が多く引用されて、権威書の地位を獲得していたこと、江戸中期の元禄年間以降、本書にとってかわる清の『天文大成』や『天経或問』が広く利用されるようになったことを指摘して、その理由を探る。

第Ⅲ部は、日本古代における儒学受容の実体を、『令集解』などの漢籍引用方法から考察したものである。第一章「引用書名からみた古代の学問」では、『令集解』の漢籍引用の方法から、中国南朝系の学統継承を再確認する。第二章「古代における『五経正義』の利用実態」、第三章「伊与部連家守と釈奠」、第四章「日本古代における『五経正義』の受容」では、奈良時代前期には伝来していた「五経正義」が、当初、単疏本としての不便さを持ち、また、類書的な利用方法にとどまっていたとみる。その後、伊与部連家守が入唐して「五経正義」を本格的に学び、帰朝後の延暦年間以降、次第に、「五経正義」は釈奠などの式次第の解釈の書となり、明経科の「道」化のもとで学習されたと論じる。また、伊与部連家守の「令釈」作者説を否定する。なお、これらの章に付して、奥村郁三編著『令集解所引漢籍備考』を書評し、適正な評価と指摘をおこなう。第五章「『令集解』戸令鰥寡条の構成と論理」、第六章「「鰥寡孤独」と「鰥寡惻独」と―日本古代における中国文理解の一様態―」では、養老戸令当該条の「鰥寡孤独」が大宝令でも同じであり、「鰥寡惻独」とはなっていなかったことを、問題の当該条の古記説と引用漢籍の分析にもとづく新知見から論証する。そして、中国では、唐代の主として開元年間以降に軍事的・社会的な理由から旧来の「鰥寡孤独」にかわって「鰥寡惻独」が広く使われるようになったが、日本では、その区別を理解していないとみる。

終論では、以上の論文の方法と成果を総括する形で、フランスの歴史家ロジェ・シャルチェらの読書論や文化論とすり合わせながら、今後の展望と課題を述べる。

本論文は、一貫した問題意識と日中史料の読解力と緻密な論証とによって、日本古代における知識と思考形態とその社会化の実体をあらたに掘り起こした労作である。

以上をもって、本論文は、博士（文学）の学位を授与するにふさわしい論文であると認められる。

なお、本論文の一部は、平成14年度科学研究費補助金（若手研究（B））および平成15年度21世紀COEプログラム早稲田大学アジア地域文化エンハンスング研究センター奨励研究費の成果に負うものである。

2004年2月10日

主任審査委員	早稲田大学教授	博士（文学）	新川登亀男
	早稲田大学教授	博士（文学）	李 成市
	早稲田大学講師	博士（文学）	川尻 秋生